

highlight

- あなたにとっての“劇場”体験を教えてください
大友良英／鈴木可奈子／福岡亮大／マルクス・ヴェルンハルト／やなぎみわ／山極壽一／渡邊守章
- 岡崎地域の方々と工事中の現場を拝見しました!
- ロームシアター京都へのメッセージをいただきました
茂山あきら／井上道義

あたらしい「劇場」へ

京都会館から「ロームシアター京都」へ

「会館は永遠に新しい文化創生の母体となり、その産褥となり、揺りかごとともに、日本文化の発展に偉大な役割を果たさなければならない」。

これは当時の高山義三市長が京都会館5周年にあたって書いた言葉。このような強い意志と市民の大きな期待を背負って、故前川國男の設計により建てられた京都会館は、国内外のアーティスト、市民の創造性を育む場として、50年余の時間を存在してきた。

そして、2016年1月10日。京都会館は劇場機能を大きく向上させ、生まれ変わる。それぞれ約2000名(メインホール)、700名(サウスホール)、200名(ノースホール)を収容可能な3つのホールに加え、人々の憩いの場となる中庭「ローム・スクエア」、レストラン・ブック&カフェ・ショップなどを備えた「パークプラザ」を新設。京都市に本社を置くローム株式会社と京都市が50年間の命名権契約を結び、「ロームシアター京都」という新しい名を得て、京都における文化芸術の拠点として再整備が進められている。

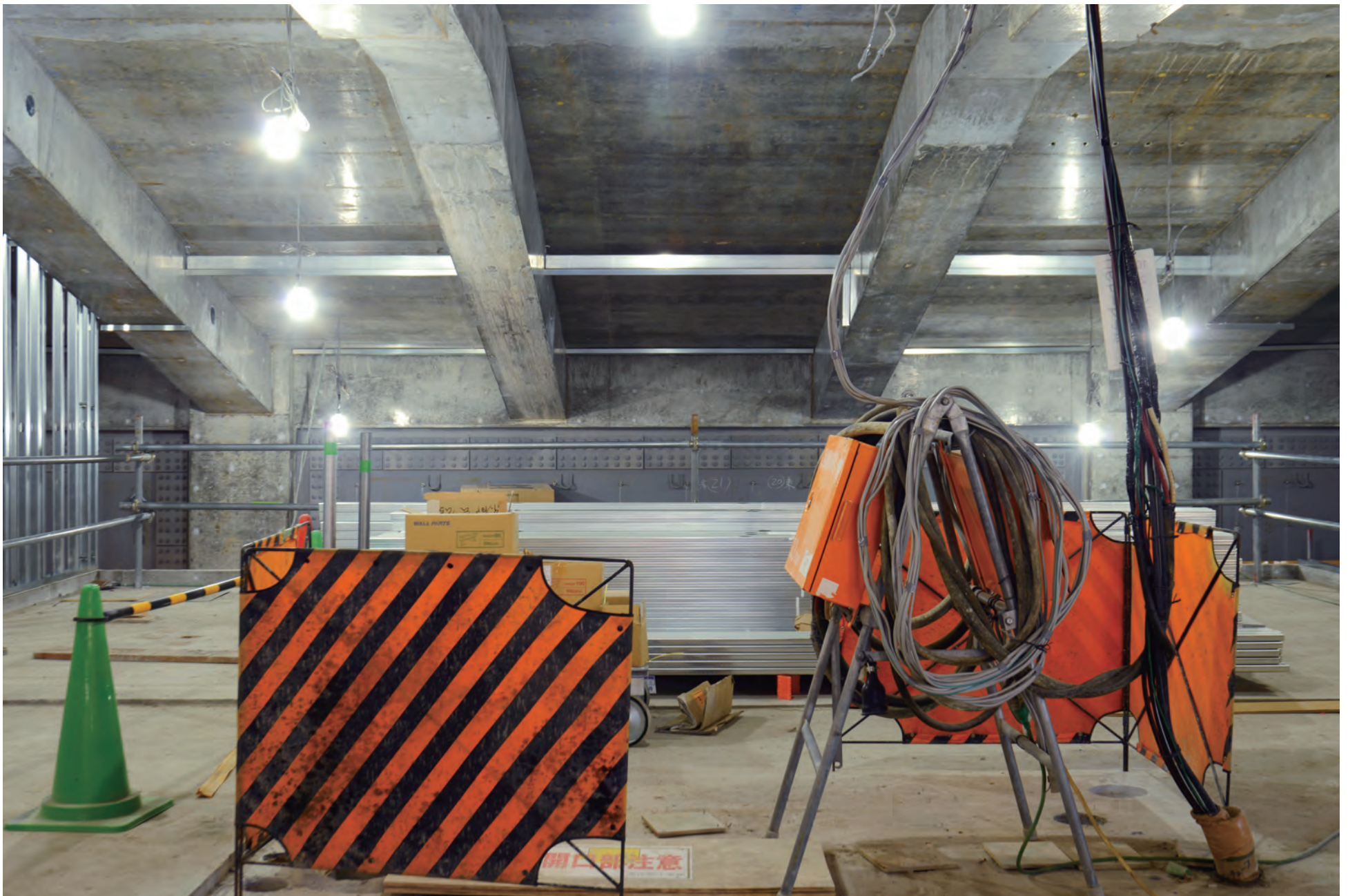
okazaki today

photo by 鈴木崇 location ロームシアター京都 date 2015年2月16日

京都会館の建物価値を継承しながら進む再整備は、基本設計を担当する建築家、香山壽夫が「過去と現在が未来に向かって対話していく仕事」と語る保存再生の一大プロジェクト。写真には、旧会議棟の一角が印象的に写された。

鈴木崇：

1971年生まれ。京都在住。スポンジを即興的に構成して撮影したシリーズ「BAU」や、平面に映る立体の影を撮った「ARCA」など、「見る」ことの本質を写真を通して追求している。昨年、作品集「kontrapunkt」をドイツのTRADEMARK PUBLISHINGから刊行。



あなたにとっての“劇場”体験を教えてください

ロームシアター京都は、「京都に劇場文化をつくる」がコンセプト。その劇場では、どんな時間、空間が存在することになるのだろう。文化・芸術と人々の生活が深く関わるここ京都で、新しく誕生する劇場のすがたを考えていくために、広く京都に関わる文化人の方々に問いかけた。

大友良英

作曲家
ギタリスト



©佐藤翔

「アンサンブルズアジア」というプロジェクトをはじめた関係で、最近は東南アジアに行く機会が多い。特に興味深いのがインドネシアで、どこの村にも劇場がある。といっても日本で想像するような劇場ではなく、屋根だけのある半野外だったり、ボロボロの公民館のようなところだったり。それでも、そこが村のガムランや儀式の舞台として、生活に密着しつつ、しっかりと今も生き続け変化し続け機能していて、彼等にとってそこで行われることは、自分たちのアイデンティティそのものですらあるのだ。かつて日本にもそんな場所はたくさんあったのかもしれない。でも、そうしたありかたは、多くの場所ではとうに滅びてしまっているように思う。同時に西欧型の劇場が輸入されたわけだけど、それを、この先、どう自分たちのものとしていくのか、過去にもどるのではなく、西洋を踏襲するのでもなく、自分たちのリアルな場所にしていくためにはどうしたらいいのか。僕らの大きな宿題だと思っている。

鈴鹿可奈子

Suzuka Kanako

聖護院ハコ橋本店 専務取締役



幼い頃からさまざまな劇場に連れられていたが、はじめて自分の足で観てみようと思ったのは、ロンドンでの「オペラ座の怪人」だった。赤い絨毯、着飾った人々、笑い声、輝くシャンパン。重厚な扉の向こうには、弦楽器の練習音と話し声の中で、開演を待ちわびるさらに大勢の観客たち。とても小さな劇場で、オペラでもなくミュージカルなので、実際はそこまできらびやかなものだったとは思えない。おそらく私は、観劇を通して「オペラ座の怪人」の世界に引き込まれたのだろう。19世紀のパリのオペラ座に入り、クリスティーヌの歌声に酔い痴れ、怪人を怖がり、憐れんだ。いつの間にか私はワンピースでは無くドレスをまとい、仮面舞踏会に参加したり雪の中を走ったりしていたのだ。

私にとって劇場とは、単に舞台を見る場所ではない。登場人物と混ざり合い、時代も世界をも飛び越える、魔法の空間である。先日、何度目かの「オペラ座の怪人」を観に行った。

隣に座ったのは偶然日本人の女の子で、留学中の彼女も何度目かになるという。私たち二人は、お互い名前も知らないけれども、ともに知っているはずの世界で手に汗を握り、涙を流し、笑っていた。

福嶋亮大

Fukushima Ryota

批評家、中国文学者



僕の「演劇体験」は、小学生のときに読みふけた『水滸伝』に始まる。この大河小説は言うなれば、中国の広い大地を舞台にした騒々しい大芝居だった。荒くれ坊主の魯智深が五台山のお寺でめちやくちやに暴れ回り、梁山泊の好漢たちがお祭りに乗じて牢獄破りを決行し、韋駄天の戴宗と乱暴者の李逵が道中で掛け合い漫才を繰り広げる――、僕はこれらの劇場的なパフォーマンスにすっかり魅了されていた。

長じてから、僕は大室幹雄さんの一連の劇場都市論を読んで、大いに感銘を受けた。古代中国の思想家は、言説を売る都市の商人であり、巧みな弁舌をふるう宮廷のパフォーマーだったというのだ。日本人は中国というと「文字の国」と見なしがちである。だが、『水滸伝』の好漢や古代の思想家のもつ身体性＝演劇性もまた、中国文化を理解する大切な鍵ではないか？ 大地と都市空間に放たれた演劇をどう考えるか――、それは僕の少年時代からの長い宿題なのである。

マルクス・ヴェルンハルト

Markus Werhard

ゲー・インスティテュート・ウィーラ鴨川館長



演劇は昔も今も、役者や観客たちが集い、一体となって成立する「集団の芸術」です。演劇は社会の動向を映す鏡となるもので、その社会の文化的意識に深く根ざしています。それは同時に集団的記憶や社会的な自己理

山極壽一

Yamaguchi Juichi

豊長類学者、
京都大学総長



私にとっての劇場は、常に自然が舞台である。アフリカの熱帯雨林でゴリラの足跡をたどり、緑のカーテンの陰からゴリラたちと顔を合わせたときに、劇は始まる。背中白い大きなオスが立ち上がって胸を両手でたたき、あたりの草木をなぎ倒して走る。そして力いっぱい地面をたたいて、どうだとかに肩を怒らせて仁王立ちになるのである。それを見て、メスや子どもたちが、私の目を意識しながら取っ組み合って遊んだり、いそいそと食事を始める。これはまさに劇場的な状況だと私は思う。そこには外部の眼と内部の目によって作られる劇が演じられるからである。見る側と見られる側に共有される感情と約束事が瞬時に立ち上がり、確かめられることなく消えていく。人間はそれを文化として操作可能なものに作り上げたのだ。劇場は限りなく文化的なものでありながら、人間の生物学的な感情に寄り添う自然との接点をもつものである。

渡邊守章

Matanabe Moriaki

京都造形芸術大学客員教授、
演出家



《劇場》あるいは《不純な、純粹の場》――この命題は、ほとんど月並みでさえある。コンサートを捨てて録音に集中したグレン・グールドのバッハは、確かに「純粹にグールドの、純粹なバッハ」である。しかしその「純粹さ」は、テクノロジーの高度化の函数であることを免れ得ないし、逆に、余り集中度の高くはない歌舞伎の劇場であっても、六代目菊五郎の「六段目」の「勘平腹切り」は、そこでしか出現し得ないような、そしてそこでしか共有できない、舞台と客席を貫いて出現する「強度」の体験であった。演奏であれ演戯であれ、フランス語で言うならば“jeu”である。《虚構性》と《真実》の、それぞれ真剣勝負の《賭け》である。そのような真剣勝負を可能にする場＝空間である《劇場》。個人と集団とを同時に包みこみ、一つの《文化》の《周縁》でもあり、かつ《中心》でもあるような特権的な場。奇跡にも近い共有体験には違いない。しかしそれなくして、人は《劇場》へと足を運ぶだろうか。

やなぎみわ

Yanagi Miwa

美術作家



劇場とは、彼岸からやって来るものを絶え間なくその体内に取り込み、再建と解体、創造と破壊を壮大に繰り返す「生き物」です。美術をやっていた私が、舞台の作演出をやるようになって一番驚いたのは、作品が残らないということ。その代わりに「再演」というものが存在することでした。しかし生身が再現するものに同じ舞台はありません。舞台を動かす人間と、それを見る人々がほんの僅かな時間、一期一会で真正面から対面する。元々は天上の神に捧げていた祭りが、やがて人と人の交歓の場となったように、劇場という生き物の体内には空洞があり、天と地を結ぶ軸を中心に人が集まる庭があります。そこは古今東西、ぐるぐると動き続けるエネルギーの交通の場なのです。いま私は、北米ツアーの旅半ばで、毎週新しい街で新しい劇場と出会っていますが、千年の都、京都に現われるのは、どのような生き物なのでしょうか。今から楽しみでなりません。

岡崎地域の方々と工事中の現場を拝見しました！

「屋上からだ」と黒谷さん(金戒光明寺)も近くに見えるんですね」「夏祭りを劇場の中庭でやるのはどうや」「ここは昔の建物の様子がよくわかりますね、なつかしいくらい」。工事の真っ最中だったため、30分程度の見学会でしたが、普段は見ることのできない現場の様子ににぎやかな声が飛び交いました。



岡崎自治連合会 会長

澤邊吉信さん



我々は建物が解体されるところから、毎日通るたびに見てますから。まずは間に合うんかいなと(笑)。それは、まあ冗談ですけど、50年くらいの建築なら、このあたりにはたくさんあるんです。だから、50年どころではなく、この先100年、200年と末代にまでつながるような、いいものを作ってほしいですね。

神宮道商店街組合

小川善一さん(京菓子司 平安殿 会長)



私が中学校の頃に京都会館ができたんですけど、思い出といえばコンサートですね。高橋真梨子、アダモ…、劇場が大きくなれば、もっといろんな大物アーティストがやって来るんじゃないでしょうか。神宮道の商店街も今はちょっとさびしくなってますけど、新しい劇場といっしょに活性化していけたらなと思ってます。

京都岡崎魅力づくり推進協議会 幹事

本多和夫さん(平安神宮 禰宜)



平安神宮の龍尾壇で毎日掃除をしながら見えています。そろそろ足場が立ち上がってきたな、とか。おとなりの建物なので、どんな建物になるのか、やっぱり気になりますね。私は京都会館ができた当時のことは知らないんですけど、学生だった70年代に、フォークソングの公演を聴きに来たことを覚えています。

新連載はじまります

「わたしと京都会館の50年」

highlightでは、読者をはじめとした市民やアーティストの証言・資料をもとに、京都会館がこれまで歩んできた時間を引き継ぎ、過去と劇場の未来をつないでいきます。そこで、みなさんの京都会館にまつわる思い出のエピソードと資料を大募集！

募集概要

コンサートチケットやパンフレット、京都会館で撮影した記念写真など、思い出の資料や写真、エピソードをお寄せください。highlight紙面や劇場の公式WEBサイトなどでご紹介させていただきます。応募の詳細は、京都市内施設で配布中のチラシまたは公式WEBサイト(<http://rohmtheatrekyoto.jp>)をご確認ください。

【受付期間】2015年4月22日(水)～2015年7月31日(金)

CONTRIBUTION



ロームシアター京都へのメッセージをいただきました。

書を持とう、劇場に帰ろう

茂山あきら

狂言役者



1960年にオープンした京都会館が、建て直されるとのことです。開館以来、不備な点が指摘されてその都度手直しはされてきましたが、建物の老朽化も進みいよいよ全面的な改築となります。今回の劇場のコンセプトは「劇場文化をつくる」だそうです。全国各地に公立ホールは多々ありますが、劇場文化を掲げる施設は意外に少ないと思います。多くのホールは、コンセプトの重心を音楽、それも西洋のクラシックにしているところが多いのではないのでしょうか。役者や演出家として芝居に関わっている僕としては、その重心が幾分でも舞台芸術全般に移ることはありがたいことです。日本では作家のなかでも芝居を書く作家は少し地位的に劣るように思われています。しかし人生の写し絵としての芝居は、クラシックや古典芸能に劣らない有意義なものと云えるでしょう。ここしばらく、人々の劇場離れを耳にします。寺山修司氏は「書を捨てよ、町に出よう」と評しました。現在は「書を持とう、劇場に帰ろう」なのかもしれません。若い人たちの劇場回帰を深く願います。

恐れ多いですが…

井上道義

指揮者／元京都市交響楽団 音楽監督、常任指揮者



©加納典明

京都会館の、ロームシアター京都の未来について述べさせていただきます。もとより、京都は重層的な歴史に彩られた歴史ある文化都市でありました。ただし、それが未来永劫続くかどうかは、あなたが未来を描くこと。つまり、今、「未来に向けて、何のために、どうするか」を描くことにかかっています。音楽にたとえれば、都という過去の作品を演奏するのは、今、生きている人。そして、何よりも新しい未来への作品＝今の京都を描くこと。京都会館に限って言えば、50年間、時代がもたらした幾つかのボタンの掛け違えで、場所も造りも人々の理想からはほど遠い、生きている演奏家にはハンディが多い建物でした。現在の建築技術をもって妥協なく建てられるならば、きっと多様な舞台芸術が理想に近い環境で行い得るだろう。いいなあ！とはいえ建物だけが重要なのではなく、「何がどのように演奏され、演じられ、人々の日常にどのような影響を与えられるか」が舞台芸術の本質です。人が都会で本当の意味で豊かに生きようとしたとき、舞台芸術は日常に無くてはならないものだから。

highlight(ハイライト)とは、演劇や映画などの見せ場、最も明るいところを意味する言葉。観客と劇場をつなぐコミュニケーションペーパーとして、「劇場」の可能性と京都・岡崎地域の文化資源に光を当てていきます。

highlight 創刊号 vol.01

編集ディレクション：竹内厚

アートディレクション・デザイン：(株)フィールド

表紙・中面写真：鈴木崇

編集：ロームシアター京都(橋本裕介、武田知也、長野夏織)

発行：ロームシアター京都 開設準備室(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)

発行日：2015年4月22日 禁・無断転載

お問合せ

ロームシアター京都 開設準備室

〒605-0033 京都府京都市東山区三条通白川橋東入3丁目夷町175-2 元白川小学校内

TEL: 075-746-3355(代表) Fax: 075-746-3366

<http://rohmtheatrekyoto.jp>